

谷崎潤一郎「魔術師」における外国語表記と理想郷の表現

稲垣あやか

はじめに

大正六年一月一日、谷崎潤一郎が「魔術師」⁽¹⁾を『新小説』(第二十二年第一卷、春陽堂)に発表した際、「虹霓」という熟語の訓みは「にじ」となっていた(『新小説』一七〇頁)。しかし、その訓みは約三ヶ月後の初刊『人魚の嘆き』収録の「魔術師」本文では「こうげい」に改められている。⁽²⁾この変更が谷崎自身の希望によるものであったことは、随筆「梅雨の書齋から」(『中外』第二卷第八号(大正七年七月一日、中外社))にある次の一文から分かる。

僕などは、原稿に折角特別な漢語を使用すると、それを雑誌社の方で勝手に意識して妙な振仮名を振られるために、迷惑を感ずること屢々である。「虹霓」と書いて是非「こうげい」と読んで貰ひたいのに、活版屋の方で御親切にも「にじ」といふルビを振る。

(『全集』(六)〔平成二十七年十二月十日〕四〇八頁)

ここでは「魔術師」の名前は挙げられていないものの、この随筆が掲載されたのが「魔術師」発表の翌年であり、なおかつ「虹霓」という熟語が随筆発表までのどの作品にも見られないことから「魔術師」のことと分かる。ちなみに、

菅屋市谷崎潤一郎記念館所蔵原稿の当該箇所を見てみると、たしかに「虹霓」には何も読み方の指示がない。⁽³⁾ 初出『新小説』は総ルビのためこの熟語にもルビを付さなくてはならず、その際に「にじ」という訓みが付されたのだろう。

このように、「魔術師」を執筆するにあたって谷崎は、漢字の読み方ひとつにまで注意を払っていた。にもかかわらず、本作には谷崎の良しとしない漢字の使用法が見られる。それは、「頭帕」^{クワバシ}「袍衣」^{トウイ}「草鞋」^{サンゲル}「半羊神」^{フアウシ}の四語である。これらの漢熟語には、いずれも西洋の言葉が訓みとしてカタカナで充てられているが、文中で西洋の言葉を使う際のこだわりを谷崎は同じく「梅雨の書齋から」の中でこう述べている。

ついでながら、漢語に英語のルビを振るのなぞも止めた方がいゝ。英語を使ふ場合には片仮名で書くか英字を用ふる事にした。い。

(四〇九頁)

この発言に従えば、谷崎は外国語を書き表す方法として(一)カタカナで記す(二)アルファベットを用いる(三)漢字にカタカナのルビを振る(以下、本稿ではこうした表記を「カナルビ表記」と呼ぶ)といった三種類を意識しており、その中でもカナルビ表記は好ましくないと考えていた、ということになる。「魔術師」での表記をそれぞれ数えてみると、(一)五十二箇所、(二)十箇所、(三)九箇所と、たしかにカタカナ表記が最も多い。しかしながら、九箇所のカナルビ表記はすべて原稿の時点で振り仮名が書き込まれており、⁽⁴⁾ その後のいずれの本文においても同じカナルビ表記のままとなっている。⁽⁵⁾ ここから「虹霓」のように出版社の判断で付されたのではなく、谷崎の意思によるものと分かる。なぜ自身の発言に矛盾するような表記を用いたのだろうか。

本稿では、谷崎の漢字に対する意識や作品内での使い方をいま一度整理した上で、カナルビ表記を使用することでどのような効果が生まれると期待していたのかを解き明かしていきたい。

一、「魔術師」におけるカナルビ表記の偏り

先に掲げた通り、「魔術師」には三種類の外国語表記がある。そのうち九箇所は、作品発表翌年の随筆で谷崎自身が否定していた、漢字にカタカナのルビを振った表記である。「魔術師」においてカナルビ表記はどのように使われているだろうか。そのことを明らかにするために、まずは「魔術師」の場面構成を整理する。

語り手兼主人公の「私」は恋人である「彼の女」の話す言葉によって、とある公園の中心部に建つ小屋「魔術の王国」の中で、夜ごと妖しい興行を繰り広げる魔術師の存在を知る。見る者を狂わせてしまうほどの美貌を持つ魔術師に惹かれた「私」は、「彼の女」とともにその公園の方へと歩みを進めていく。押し寄せる群衆に流されながら二人がまずたどり着いたのは、公園の広場。色とりどりのイルミネーションによって光り輝く園内には、あらゆる奇抜なものが備わっていた。その後、公園の広場を抜けた二人は、それまでの賑わいとは一転した物淋しい一廓に立ち入る。「魔法の森」と呼ばれるその空間は、木々が生い茂った月明かりさえも届かない暗闇であった。森をさらに進んだ先に、「魔術の王国」と称される小屋がある。小屋の内部には荘厳な装飾が隙間なく施されており、舞台の上には想像を絶するほどの美貌を持った魔術師がいた。

このように、「私」と「彼の女」はいくつかの場面転換を経て魔術の王国にたどり着く。二人の道筋を、場所の移り替わりに沿って四つに区切ってみる。まず、二人が会合を果たしたアゼニユウから公園に入るまで（原稿一枚目第四行～二十三枚目第七行）を場面1とし、公園の中（二十三枚目第八行～五十枚目第一行）は場面2とする。その後、公園を抜けた先の「魔法の森」（五十枚目第二行～六十七枚目第一行）は場面3、そして公園の最奥に建つ「魔術の王国」の内部（六十七枚目第二行～一〇八枚目第七行）は場面4となる。⁶⁾

この四場面のうち、谷崎の想定する三種類の外国語表記はそれぞれどのように分布しているだろうか。それを探るべく、各場面に登場する外国語表記を数えてみた(表1)。場面1では、(一)カタカナ表記が十二箇所、(二)アルファベット表記が六箇所、(三)カナルビ表記が〇箇所使われている。同じように見ていくと、場面2では(一)十五箇所、(二)二箇所、(三)〇箇所、場面3では(一)八箇所、(二)二箇所、(三)〇箇所であった。ここから分かるように、場面3まではカナルビ表記はまったく使われていない。言い換えれば、カナルビ表記が見られるのは場面4の「魔術の王国」内部のみである。場面4は、(一)十七箇所、(二)〇箇所、(三)九箇所であった。

複数の場面によって構成された物語であるにもかかわらず、カナルビ表記の使用は一つの場所に偏っている。この点から、谷崎がカナルビ表記を何らかの意図を持って使用していた可能性が浮かび上がる。「魔術の王国」がどのような場所として描かれているかを改めて確認することによって、谷崎がカナルビ表記にどのような効果を期待をしていたかを明らかにできるのでないだろうか。

二、「魔術の王国」はどのような空間であるか

①美に仕える儀式——王国で何が行われるか——

「魔術の王国」は公園の中にある。公園には円形劇場や闘牛などが備わり、活動写真館では世にも恐ろしい作品が上映されているらしい。「私」は公園の情景を「世界中の奇蹟と云ふ奇蹟の凡てが集まつて」いると形容する(原稿九枚目〔資料紹介〕一一七頁 ※以下、〽内)に「資料紹介」の頁数を記す)。その公園よりも「もつと鋭くわれく」の魂を脅かし、もつとわれわれの官能を蠱惑する物がある」場所が、「魔術の王国」である(十六枚目(一一二〇頁))。そして「彼の女」によれば、魔術師の容貌は「恋人を持つ女の身には、近寄らぬ方が安全」なほど美しいという(十七枚

目（一二二頁）。ただ、毎日のように公園に通っている「彼の女」でさえ、王国の中には「まだ一遍も中へ這入つたことがな」かった（十七枚目（一二二頁））。それほどまでに、「魔術の王国」はその他の空間と一線を画しているのである。その後、「私」と「彼の女」は「魔術の王国」にたどり着く。それまでに通過してきた極彩色のイルミネーションに彩られた広場や、蝙蝠のような形をした木が立ち並ぶ物寂しい森もかなり現実離れた空間ではあるが、「魔術の王国」の異質さはその比ではない。そこで繰り上げられる魔術の演目は「時間の短縮」「不思議な妊娠」など、十分間で植物の種子が生育したり、一人の女性の妊娠から分娩までが済ませられたりといった現実では起こり得ない超常現象ばかりである。殊に、最後に演ぜられた「人身変形法」は、いっそう現実離れたものであった。

呪文の力で、任意の人間の肉体を、即座に任意の他の物体——鳥にでも虫にでも獣にでも、若しくは如何なる無生物、たとへば水、酒のやうな液体にでも、諸君のお望みなさる通りに変形させてしまふのです。或は又、全身でなくとも、首とか足とか、肩とか臀とか、ある一局部だけを限つて、変形させる事も出来ます。

（七十九〜八十枚目（一五六頁））

魔術師は、「人身変形法」と名付けられた魔術をこのように説明し、まずは自らの奴隷たち六人に実演した。奴隷たちが人ならざるものになっていく様子を見せつけられた観客たちは、初めこそ恐れおののいていたが、次第に魔術師の魅力に惑わされ、「私」を含めた二十人の観客が「魔の王国の捕虜」となるべく変身を願ひ出た。

これほどまでに観客を虜にしているのは、魔術師の美しさである。事前に「彼の女」から話を聞いていた「私」が「予想して居た彼の顔立ちと、実際の輪郭とを比較して、美さに格段の相違があ」ったと感じるほどの美貌を持つ魔術師は、「あらゆる人種の長所と美点はかりから成り立つた」、「最も完全な人間美の表象」と称賛されている（八十一〜八十四枚目（一五七〜一五九頁））。

そのような魔術師の容貌に魅了され、魔術を施された「犠牲者」たちはそれぞれ「美しい孔雀」、「豹の皮」、「二本の純銀の燭台」、「二匹の優しい蝶」、「金の草鞋」といった美しい生物や調度品になりたいと望んでいるが、これらはすべて、魔術師の美しさをより際立たせるために奉仕したいといった願いに基づいている。「半羊神フアウシになつて、魔術師の玉座の前に躍り狂つて居たい」といった願望を発した「私」も例外ではなく、「魔術師の美貌に溺れ」て、「お前の奴隷に使つてくれ」と懇願している（一〇三〜一〇四枚目（一六九〜一七〇頁））。つまり、「魔術の王国」で繰り広げられているのは、王国の主である魔術師の美貌をより輝かせるために観客たちが姿を変え、身も心も魔術師に捧げる儀式である。

②強烈な輝きを放つ空間 —— 理想郷をどのように描くか ——

このように、魔術師の美に仕えたいといった願いがかなえられ、「太陽の如く晴れやかな、海の如く広大な愉悅の情」（一〇五枚目（一七〇頁））が得られる「魔術の王国」は、「私」にとつての理想郷といえる。その理想郷がどのような場所であるか、「私」は次のように説明する。

門を這入つて僅かに五六歩進んだ時、今まで陰惨な暗黒の世界に馴れて居た私の瞳は、俄かに満場の眩い光線に射
 竦められて、ぐりぐりと抉られるやうな痛みを覚えました。あの、礪々たる土塊の外見を持つて居た魔術の王国は、
 意外にも金壁燦爛たる大劇場の内部を備へて、柱や天井に隙間なく施された荘嚴な裝飾が、煌々とした電灯に映じ
 て眼の醒めるやうに輝いて居るのです。
 （六十七枚目（一四九頁））

寂しい外観とは裏腹に、王国の内部は「柱や天井に隙間なく施された荘嚴な裝飾」や「煌々とした電灯」によつて光り輝いていた。谷崎は、主人公が無上の悦楽に目覚める場所を、煌びやかな裝飾に満ちあふれた空間として書き表して

いるのである。

こうした情景描写に加えて、公園の広場から王国に至るまでに「魔法の森」を通る、といった場面構成も「魔術の王国」の煌びやかさを際立たせるための役割を担っているということを主張したい。けばけばしく彩られた公園の広場から王国にたどり着くまでに通る「魔法の森」は、暗く侘しい場所である。森に足を踏み入れた「私」は、その一転した静けさの気味悪さに際して「不測の災に待ち受けられて居るやうな疑心の昂まるのを覚え」（五十枚目～一三九～一四〇頁）、その先の空間にもっと強烈なものが待っているのではないかと期待を高める。さらに、森の「陰惨な暗黒」に目が慣れてしまった「私」は、王国に入るとたちまち「満場の眩い光線に射竦められて、ぐりぐりと抉られるやうな痛みを覚え」て、王国の内部を「眼の醒めるやうに輝いて居る」と感じている（六十七枚目～一四九頁）。これらから、広場と王国との間に「魔法の森」を挿入するといった場面構成が、その先に待ち受ける場所への印象をより強烈なものにするための演出であると考えることができよう。⁽⁷⁾

絶世の美貌を持つ魔術師が支配する「魔術の王国」。それは主人公「私」が、「人身変形法」によって魔術師の美に奉仕したいといった願いをかなえ、無上の悦楽に浸る場所である。そのような場所を〈強烈な輝きを放つ空間〉に仕立て上げるために、谷崎は情景描写や場面構成を用いて緻密に表現しようとしていた。「魔術の王国」という空間をそこまですて丁寧に描き出そうとしていた谷崎であるからこそ、王国内のみに登場するカナルピ表記も、〈強烈な輝きを放つ空間〉であることを表現する役割を担っているのではないかと考えられる。ただし、「魔術師」での使われ方一例のみで判断するのは早計であろう。「魔術師」発表までの作品でのカナルピ表記の用いられ方を確認し、この表記法を谷崎がどのように活用していたのかを見ていく必要がある。

三、他作品での使用から見たカナルビ表記

①カナルビ表記が担う役割の検討

明治四十三年の「誕生」から「魔術師」が発表された大正六年一月一日までの四十一作品に登場するカナルビ表記をすべて確認したところ、「魔術師」を含む二十作品にカナルビ表記の使用が認められ、その数は一〇〇箇所に入った（表2）。それらの使用意図を作中での使われ方からすべて分類することは現段階ではかなわなかったが、表2の通り、「埃及」^{エジプト}「土耳其」^{トルコ}「羅馬」^{ローマ}といったように地名・国名を書き表すためにカナルビ表記を用いている例が二十二箇所あった。谷崎は「梅雨の書齋から」の中で、「少数の国名や動植物の名」といった「古来から使ひ馴れて居る一定の名詞」だけは例外として「字引にないやうな読ませ方」をしても良いといった見解を述べている（『全集（六）』四〇八頁）。この発言から、地名・国名を表すそれらのカナルビ表記は、そのように表記するのが慣例的であると谷崎が見なしていたための使用といえる。

そのほかの使用例でいえば、明治四十五年の「あくび」（『東京日日新聞』〈明治四十五年二月一〜四、六〜十一、十五〜十七、東京日日新聞社〉）には八箇所のカナルビ表記が存在するが、そのうち「逐ひ出し」^{エリミネーション}「憂鬱」^{ウロウロ}「年級」^{クラス}「幽霊」^{ゴースト}の四箇所は、登場人物の会話文中での使用である。ここでのカナルビ表記もまた、谷崎による意図的な使用と考えられる。随筆「ノートブックから」（原題「帳中鬼語」、初出は『社会及國家』第四卷第六号、第五卷第一、三号〈大正四年六月十日、七月十日、九月十日、一匡社〉）には、「われ／＼日本の作家が、鎌倉時代や平安朝時代を背景として戯曲を書かうとする時、一番困るのは其処に出て来る人物の台辞である」（『全集（九）』〈平成二十九年二月十日〉三八七頁）といった主張が見られる。口語というのは文章と比べて「自由に乱雑に変化し墮落」して今に至るため、もし平安朝ごろを舞

台とした史劇の登場人物が「純然たる明治大正の口語を使用」していたとすれば、観客は違和感を覚え、「甚だわざとらしい感じ」を起こさずにはいられないという(以上、三八七～三八八頁)。つまり谷崎は、時代錯誤な口語の使用によって「観客のイリユウジョンを破壊する恐れ」(三八八頁)があると考えていたのである。「一高」の男子学生の日常を描いた「あくび」では、前述の如く明治期の男子学生による会話にカナルビ表記が用いられている。ここから、「あくび」でのカナルビ表記が、ことさらに外来語を使ったが、当時の学生たちの風潮を表しており、作品の時代設定に沿った言葉遣いであることを表現するためにも、谷崎がカナルビ表記を利用していたことがうかがわれる。

他作品でのカナルビ表記の使用例を確認できるところで「魔術師」のカナルビ表記を見てみると、「頭帕」^{クワッパン}「袍衣」^{トウイガ}「草鞋」^{カンゲル}はいずれも服飾品の名称で、「半羊神」^{フアウシ}はギリシヤ神話に登場する神の名前である。そのため、これまでに見えてきたような、地名・国名の表記や時代設定に合った言葉遣いのための表記とは違った意味合いを持つであろう。

一方で、作品のある一場面にカナルビ表記が偏って登場する、といった「魔術師」と同様の使われ方も確認できた。それは、明治四十四年の「少年」(『スバル』第三年第六号〈六月一日、昂発行所〉)と大正三年の「金色の死」(『東京朝日新聞』「短篇集」欄〈十二月四～十七日、朝日新聞合資会社〉)である。この二作品でのカナルビ表記の登場場面をそれぞれ整理することで、「魔術師」のような局所的な場面でのカナルビ表記に込められた谷崎の意図を明らかにしたい。

②カナルビ表記が偏在する空間の特性

「少年」では「煖爐棚」^{マントルピース}「床靴」^{スリッパ}「燐寸」^{マッチ}といった三語のカナルビ表記が、いずれも西洋館二階の部屋を描いた場面で登場する。また「金色の死」のカナルビ表記は十六語だが、会話文および作中人物の日記文に登場する、先に見た「あくび」のような男子学生の会話を表現する用法が八語ある¹⁰。それらを除き、地の文に用いられるカナルビ表記のみに着

目すると、「盆地」^{デレンシト}「外袍」^{トローガ}「草履」^{サンダール}「廊下」^{ベランダ}「白楊」^{ポプラ}「小亭」^{パキリオン}「浮彫」^{レリーフ}「半羊神」^{フオオオン}の八語すべてが箱根の盆地の場面に集中している。⁽¹⁾

「少年」では西洋館二階の部屋において、主人公の栄ちやんが友人の姉光子による「燭台の代りにおなり」(『全集(一)』六十九頁)という命によって、両手足を縛られ額に載せた蠟燭に明かりをともされる。そして、ここでの経験を契機に「嬉々として光子の命令に服従」するようになる(七十頁)。光子の容貌は歌舞伎『祇園祭信仰記』の「美しい雪姫」に喩えられる(五十四頁)。美しい支配者の手で人ならざるものに変身させられ、それによって主人公が快楽を覚えるといった展開は「魔術師」と共通している。

「金色の死」の箱根の盆地は、主人公岡村が創造した「絢爛なる芸術の天国」(『全集(三)』二〇一頁)である。盆地では岡村が「多年頭に描いて居た理想の芸術」(二〇四頁)を完成させるべく、世界中から集めてきた男女に有名な美術品の構図を模倣させて「生ける人間を以て構成された」(二〇九頁)作品を創り上げている。その空間を支配する岡村は「殆ど華美の極点に達し」たと称されるほど美しい容姿を持っており(二八九頁)、ここでも登場人物が美しい支配者の手で人ならざるものに変身させられるといった構図が認められる。なお、この作品は岡村が自らの全身に金箔を塗布したことで「体中の毛孔を塞がれて」死に、終わりを迎える。金箔を纏ったのは「如來の尊容を現じ」るため、語り手は「此のくらゐ美しい人間の死体を見た事がありませんでした」と岡村の亡骸を振り返る(以上、二二〇頁)。この点から、主人公である岡村自身も「自己の芸術の爲め」(二二〇頁)に身を捧げ、変身願望をかなえたと見ることが出来る。

このようにカナルビ表記が偏在する空間は、「魔術師」だけでなく「少年」と「金色の死」においても主人公の理想郷といえる場所であり、そこでかなえられるのは、いずれも、人ならざるものに変身して美しいものに仕えたいといっ

た登場人物たちの欲望であった。「魔術師」ではそうした場所を〈強烈な輝きを放つ空間〉として描いていたが、この二作品ではどのような場所とされているだろうか。それぞれ、その空間の情景描写などから整理したい。

③ カナルビ表記が置かれる場所の描かれ方

「少年」は、主人公が光子に招かれて、普段は入ることの許されない西洋館の二階へと足を踏み入れる。そこがどのような空間であるかは、次のように説明される。

中央に吊るされた大ランプの、五色のプリズムで飾られた蝦色の傘の影が、部屋の上半部を薄暗くして、金銀を鏤めた椅子だの卓子だの鑑だのいろ／＼の装飾物が燦然と輝き、床に敷き詰めた暗紅色の敷物の柔かさは、春草の野を踏むやうに足袋を隔て、私の足の裏を喜ばせる。
 (『全集(一)』六十四頁)

西洋館二階の部屋はこのように燦然たる輝きにあふれている。ここから、やはり特別な営みが行われる理想郷は〈強烈な輝きを放つ空間〉であるべきだという谷崎の考えがうかがえる。さらに「魔術師」に見られた場面構成による演出と同様の手段が「少年」にも用いられる。扉を開けて西洋館二階の様相を初めて目の当たりにした主人公栄ちやんは、「ぼつと明るい光線が一時に瞳を刺したので、クラクラしながら眼をしばた、」いているが(六十四頁)、これは「魔術師」で「魔術の王国」内部の光景を目にした「私」と同じ反応である。こういった反応が引き起こされるのは、西洋館の二階に至るまでに「真つ暗で、人の居さうなけはひもなく、カタリとも音がしない」廊下を通ることと暗い場所に目が慣れてしまったためで、そのような場所にいったん身を置くことで栄ちやんが「半ば、恐怖、半ば、好奇の情に充たされ」ているのも、「魔術師」で「魔法の森」を通過することで主人公に生まれた心情の変化と同じである(以上、六十四頁)。西洋館二階の部屋という主人公にとっての理想郷は、「魔術師」と同様に〈強烈な輝きを放つ空間〉として表され、ま

たその輝きを際立たせるために直前に暗闇を置くといった場面構成も「魔術師」で見たのと同様である。

「金色の死」における箱根の盆地は、岡村が多額の私財を投じて丹念に創り上げた「理想の芸術」である。盆地には、有名絵画や彫刻を人体によつて模倣した作品のほかにも「古今東西の様式の粹を萃めた幾棟の建築物」が建てられており、「丹麿粉壁は朝日に輝き、円楹礎瓦は夕陽に彩られ」ていた（以上、『全集（三）』二〇二頁）。盆地を訪れた語り手はそれらを眼前にし「いかに鬼麗の極みであつたかは、概ね読者の想像に委せて詳細な記述を試みる事を避け」（二〇七頁）としながらも、最後にたどり着いた浴室の描写からは、そこが〈強烈な輝きを放つ空間〉であつたことが読み取れる。浴室の入り口に到達した語り手は、「広大な堂宇の内部には既に電灯が煌々と灯されて居るらしく、其光線が円い硝子張の天井を徹して夜の空にあか／＼と反射して居」るのを発見し、実際に室内に入つてみると「燦爛たる光と色と湯気とのために瞳を射られて茫然として立ちすく」んでしまうほど輝きに満ちた空間であつたと説明している（以上、二〇八頁）。このように、「金色の死」における理想郷もまた、華美な装飾が施された煌びやかな空間として描かれていたのであつた。

このように「魔術師」発表までの他作品をすべて確認したところ、「少年」と「金色の死」の二作品にカナルビ表記の偏在を見ることができた。そして、そのカナルビ表記が集中して登場する場面は、両作品とも「魔術師」と同様に主人公にとつての理想郷であり、その場所はいずれも〈強烈な輝きを放つ空間〉である。カナルビ表記の偏った場面での使用が「魔術師」だけでなく他の二作品にも見られること、またその使用場面も「魔術師」と似通っていることから、カナルビ表記を使うことで〈強烈な輝きを放つ空間〉を演出することができるかと谷崎が考えていた可能性はより強固なものとなった。では、谷崎はカナルビ表記にどのようなことを期待していたのであるか。その表記を用いることで紙面にどのような効果が生まれると考えていたのかを探り、どのような意識を持つてカナルビ表記を〈強烈な輝きを放つ

空間)に登場させていたのかを考察したい。

四、カナルビ表記の効果を随筆から考える

カナルビ表記の特徴は、西洋の音で読むものの、その表記は漢字という点にある。西洋と東洋、遠く離れた異国の言葉同士を組み合わせるることによって生まれる不調和は、「魔術師」において、「何処の国の何と云ふ町であつたか、今ではハツキリと覚えて居」ない(一枚目(一一二頁))と、「私」が説明する作品舞台が異国情緒のあふれる空間であることを際立たせる役割を担っているといえよう。実際に作中には、「日本の金閣寺風の伽藍」「サラセニツクの高閣」「ピサの斜塔」(以上、三十五枚目(一一三頁))といった世界各地の建築物の名前が挙げられたり、「支那人だの、印度人だの、欧羅巴人だの、種々雑多な服装をした凡べての人種」(六十八枚目(一一五〇頁))が登場したりと、その場所が「何処の国の何と云ふ町であつたか」を特定させないような工夫が見て取れる。

「少年」と「金色の死」においても、カナルビ表記の偏在する場面は、異国情緒のあふれる場所として描かれる。「少年」の舞台は、「遣り水、築山、雪見灯籠、瀬戸物の籠、洗ひ石」(『全集(一)』三十七頁)といった浮世絵に描かれるような日本館とレンガ造りの西洋館とが敷地内に並ぶ、東西の文化の交じった空間である。「金色の死」の舞台である箱根の盆地にもまた、「支那流の楼閣」「パルテノンの梯」「藤原時代の釣殿」(『全集(三)』二〇二頁)といった世界中の建築物が建てられている。このような異国情緒の漂う空間を描く際にカナルビ表記を用いて西洋の音を充てることで、読者はより異国を想起しやすくなるだろう。

しかしながら、単に異国情緒を表すだけならば、カタカナ表記でもアルファベット表記でもよいはずである。にもかかわらず、谷崎はカナルビ表記を選択している。わざわざ漢字で表記し、それに外来語の訓みをカタカナで付す、といっ

た表記を用いる必要がなぜあったのだろうか。この点に着目し、カナルビ表記に備わるさらなる可能性を検討してみたい。随筆「ノートブックから」では、新聞や小説を中心に無理な当て字が横行している当時の様相を、「振仮名がなければ相当の教育ある者にも、誤りなしに一枚の新聞紙すら読めないやうな悲しむ可き現象」（『全集（九）』三九一頁）と諷めている。その一方で、同じ時期には尋常小学校で学習する漢字の数に制限が設けられるなど、「漢字節減論」の声も高まっていた¹³。谷崎の主張は、漢字の濫用にも節減論にも異を唱えるもので、それは「ノートブックから」に次のように記される。

繰り返して云ふ。吾人は漢字を廃止せよと云ふものではない。否、少からず漢字に対しては一種の愛着心を持つて居る。平仮名ばかりの文章の、光彩に乏しく、陰影に乏しく、且読みづらいことを知つて居る。それ故、使用法が正当で簡明であるなら成る可く漢字を使用したいと思つて居る。

（三九二頁）

もし漢字廃止論や節減論に従つて平易な文字のみを使って文章を書くとなれば、字面の少ない文字ばかりが並ぶことになるが、そうした文章の欠点として、読みにくさよりも先に「光彩に乏しく、陰影に乏しい」点を挙げている。ここから、谷崎にとって文章の読みやすさと同じくらい（字面から得られる効果）が重要であったことが分かる。そして、「成る可く漢字を使用したい」と考えるのは、平仮名ばかりの文章には乏しい「光彩」や「陰影」が漢字には備わっているためという。

漢字に平仮名にはない美しさがあるといった考えは、同時期のほかの随筆でも言及されている。中でも「魔術師」発表と同年の「詩と文字と」（『中央文学』創刊号〈大正六年四月一日、春陽堂〉）には、文字とりわけ漢字の美しさが繰り返し説かれている。

詩人が、幽玄なる空想を彩らんがために、美しき文字を捜し求むるは、恰も美女が妖冶なる肢体を飾らんがために、

珍しき宝玉を肌に附けんと欲するが如し。詩人に取りて、文字はまるで宝玉なり。宝玉に光あるが如く、文字にも亦光あり、色あり、匂あり。金剛石の燦爛たる、土耳其石の艶麗なる、アレキサンドリアの不思議なる、ルビーの愛らしき、アクアマリンの清々しき、——此れを文字の内に求めて獲ざることなし。故に世人が、地に埋れたる寶石を発掘して喜ぶが如く、詩人は人に知られざる文字を見出して驚喜せんとす。〔全集（六）四一三頁〕

右は「詩と文字と」の冒頭である。文字の美しさは、種々の寶石に喩えられており、谷崎にとつて「美しき文字を捜し求むる」ことは、美女が珍しい宝玉を纏って自身の美しさを際立てるのと等しいものであった。ここで言われる「美しき文字」が漢字を指していることは、同随筆での次の発言から判断できる。

漢字の音韻の豊饒なる、敢て歐洲の國語に劣らずして、而も眼に訴ふる所の多き、到底後者の比にあらず。漢字に多種多様な字畫あるは、恰も寶石に千態万状の結晶あるが如し。即ち知るべし、実用的に最も不便なる漢字は、芸術的に最も便利なる事を。〔四一四頁〕

漢字の擁する多種多様な字畫は、千態万状の結晶を備えた寶石のように美しいものとして谷崎の目に映っていた。そして、谷崎が作中に漢字を多用するのは、そういった「漢字の裝飾的、繪畫的方途」〔四一四頁〕を利用し活用するためであるという。字畫の複雑な漢字を「実用的に最も不便なる」ものと認めながらも、「芸術的に最も便利」であると評価している点は、先に見た「ノートブックから」で述べられていた漢字に対する考えと共通しており、「漢字は早晚滅亡すべきを以て、今より制限するに如かず」〔四一四頁〕といった漢字廃止論や節減論を念頭に置いたものと受け取れる。これまで見てきたように、谷崎は、漢字の見た目に〈平仮名には乏しい「光彩」や「陰影」や〈寶石のような美しさ〉を認めていた。「詩と文字と」での喩えを引用すれば、美女が寶石で着飾るのは、その「妖冶なる肢体」である。では、寶石のように美しい漢字で何を飾ろうとしていたのだろうか。それは「幽玄なる空想」であるという。つまり、自身の

創作物を装飾するために漢字の見た目を利用していたのである。画数の多い漢字の見た目をまるで宝石のようだと言えらる谷崎にとって、漢字を並べるとはすなわち紙面を煌びやかに装飾することであった。多種多様な漢字を用いれば宝石を鏤めたように色とりどりの文章になり、「光彩」に富んだものになる。そう考えていたからこそ、使い方を整理した上でより多くの漢字を使用しようと考えていたのであろう。

「魔術師」など三作品において、カナルビ表記という自らの唱える規則に反した表記が多用される理由も、この点に見いだすことができる。カナルビ表記の使用は「漢字整理論」に基づけば、一定の音訓から外れた使用であり、好ましくないものである。しかしながら、カナルビ表記の使用によって、より多くの漢字を文章に埋め込むことができる。こういったカナルビ表記の特性を生かし、宝石のような美しさを備えた漢字を紙面に多く鏤めることで、「幽玄なる空想」は彩られ、作品舞台の煌びやかさをより鮮明に読者に伝えられると、谷崎は考えていたのでないだろうか。

「魔術師」において唯一カナルビ表記が用いられる「魔術の王国」は、他の場面とは比べ物にならないほどに〈強烈な輝きを放つ空間〉である。これは「少年」や「金色の死」も同様である。西洋館二階の部屋や箱根の盆地は、主人公にとつての理想郷であり、〈強烈な輝きを放つ空間〉として他の場所とは区別される。谷崎は、漢字を多用することで宝石を鏤めたような輝きが文章に生まれる、といった考えを持っていた。これらを踏まえると、敢えてそういった場面のみにカナルビ表記を用いることで、その空間が他の場面から際立って輝かしい場所であることを字面から演出できると考えていた可能性を指摘できる。

漢字の見た目に対して〈宝石のような美しさ〉を見いだし、漢字を多用した文章には〈平仮名には乏しい「光彩」や「陰影」が生まれると考えていた谷崎は、情景描写や場面構成では表現し尽くすことのできなかつた輝きを、漢字という宝石によって補おうとしていたのではないだろうか。本来好ましくないとされるカナルビ表記は、より多くの宝石を

紙面に鏤められるという特性を以てして、〈強烈な輝きを放つ空間〉を演出するために利用されたのであろう。

おわりに

以上が「魔術師」におけるカナルビ表記の考察である。「梅雨の書斎から」にて「漢語にルビーを振るのなぞも止めた方がいゝ」といった主張を唱える谷崎は、「魔術師」の原稿に「頭帕」「袍衣」「草鞋」「半羊神」の四語九箇所をカナルビ表記として書き表していた。主人公の理想郷たる「魔術の王国」内部のみに用いられるカナルビ表記は、そこが〈強烈な輝きを放つ空間〉であることを演出するための表現技法の一つと考えられる。こうした表現技法の発見は、谷崎の創作活動における、ある姿勢の解明といった面でも重要な意味を持つ。「魔術師」に見られるカナルビ表記の偏りからは、谷崎が作品世界の雰囲気や丁寧に描き出すための工夫として、情景描写や場面構成だけでなく〈字面から得られる効果〉にも期待をしていたことが分かるためである。

とはいえ、表2に列挙した「魔術師」発表までの他作品でのカナルビ表記の使用例を見ても分かるように、「魔術師」のような〈強烈な輝きを放つ空間〉の演出効果は、カナルビ表記の担う役割としての一例にすぎない。例えば、「独探」において国名や地名、人名といった固有名詞を除いて唯一用いられる「渡り鳥」はドイツ人の父を持つG氏の発言内が登場するが、この語にはドイツ語の音が充てられており、登場人物の人物像を描き出すために会話文の言葉選びに苦心していた様子がうかがえる。このように、谷崎がカナルビ表記に期待するそのほかの効果がどのようなものであるかを考察するためには、他作品での使用の特徴をいま一度すべて確認する必要があるだろう。

谷崎が「魔術師」を描く上でどのようなことに留意していたのかといった点についても、今後、引き続き検討を加えていきたい。「毒々しいペンキ絵の、魔術の看板」や「印度更紗の幕」といった「魔法の森」に登場する色彩の鮮やか

な情景描写が、原稿の段階で書き換えられていることから、谷崎が「魔術師」という作品を描くために相당한工夫を凝らしていたことは明白である。今回はカナルビ表記による表現方法に焦点を当てたが、情景描写や場面構成に込められた意図についても、今後ひとつずつ丁寧に解き明かしていきたい。

注

- (1) 本稿での「魔術師」の本文は、芹屋市谷崎潤一郎記念館所蔵の自筆原稿を底本とする。この原稿については、拙稿「資料紹介」谷崎潤一郎「魔術師」原稿および周辺資料——翻刻・解説」（『女子大國文』第一六九号〈令和三年九月三十日、京都女子大学国文学会〉）を参照されたい。本稿では、以下、右拙稿を「資料紹介」と略記する。なお、そのほかの作品の引用は、すべて『谷崎潤一郎全集 全二十六卷』（中央公論新社）に拠り、以下同書を『全集（巻数）』と略記し発行所は省略する。また、引用に際して通行の字体に改めている。
- (2) 『人魚の嘆き』（大正六年四月二十日、春陽堂）五十六頁。
- (3) 原稿二十枚目。「資料紹介」では一二三頁に当たる。
- (4) 「頭帕」は原稿七十二枚目第三行〈資料紹介〉一五二頁 ※以下、〈 〉内に「資料紹介」の頁数を記す、「袍衣」は七十三枚目第九行〈一五三頁〉、「草鞋」は七十三枚目第十行〈一五三頁〉、「半羊神」は一〇四枚目第一、二行、一〇六枚目第七行、一〇七枚目第五、八行〈一七〇〜一七二頁〉に登場する。
- (5) 「魔術師」は、初刊本『人魚の嘆き』以降、大正八年『人魚の嘆き 魔術師』（八月十七日、春陽堂）、昭和二年『人魚の嘆き』（五月十八日、春陽堂）と、三度び単行本に収録されている。「頭帕」の訓みは、初刊本『人魚の嘆き』では「タバ・」（八十頁）と、昭和二年『人魚の嘆き』では「タアバー」（五十九頁）となっているものの、いずれもカナルビ表記である。また、『人魚の嘆き 魔術師』では、「半羊神」の訓みが二箇所省略されている（八十六頁）。
- (6) 場面1は「資料紹介」一一二〜一二四頁に、場面2は一二四〜一三九頁に、場面3は一三九〜一四九頁に、場面4は

一四九〜一七二頁にそれぞれ相当する。

(7) 「魔法の森」を暗い場所として描くための工夫は原稿からも読み取ることができる。原稿では初め「魔術の王国」の外観には「毒々しいペンキ絵の、魔術の看板」が掛かっているとしていたが、推敲の過程でこの描写は削られている。また、王国の入り口も「印度更紗の幕」から「冷い鉄の門」に改められている。「魔法の森」からは色鮮やかな事物が徹底的に取り除かれており、こうした書き換えから谷崎が「魔法の森」をより暗い場所として描こうと試みていたことがうかがわれる。なお、以上二箇所を書き換えについては「資料紹介」(資料3・2)「原稿」書き換え箇所一覧表の通し番号26と30をそれぞれ参照されたい(一七五頁)。

(8) それぞれの語の登場箇所は順に、『全集』(二) (平成二十七年十二月十日) 七十八、七十九、八十一、九十一頁。

(9) それぞれの語の登場箇所は順に、『全集』(一) (平成二十七年五月十日) 六十四、六十六、六十七頁。

(10) 「線」(『全集』(三) 一八三頁)、「効果」(一九三頁)、「共存状態」(一九四頁)、「才能」(一九六頁)、「料理」(美学)「精神的」(実学的) (以上、一九八頁) の八語。

(11) それぞれの語の登場箇所は以下の通りである。「盆地」(『全集』(三) (平成二十八年七月十日) 二〇二頁)、「外袍」(草履)「廊下」(以上、二〇四頁)、「白楊」(白樺)「小亭」(以上、二〇五頁)、「浮彫」(二〇八頁)、「半羊神」(二一〇頁)。

(12) 神戸和昭氏、矢島正浩氏「漢字を中心とする国語問題年表」(佐藤喜代治編『漢字講座第11巻 漢字と国語問題』(平成元年六月二十日、明治書院) 三三三〜三六三頁)によれば、明治三十三年八月二十日に改正された小学校令に伴い、翌二十一日、文部省は尋常小学校四年間で教える漢字を二二〇〇字に制限した。その後も、国定教科書によって小学校四年間の新出漢字がさらに減り八六〇字になったり(明治三十七〜四十二年)、文部省が漢字の整理統一のために国語調査室を設立したり(大正五年)と、教育界を中心に漢字節減の機運が高まっていた。

(13) 本稿冒頭で取り上げた「梅雨の書斎から」も、その時流を受けて書かれたものと見ることがができる。この随筆は「名前を忘れてしまったが、東京朝日新聞記者の某君が、此の前の中央公論で新聞振仮名廃止論と云ふものを唱へて居られた」(『全集』(六) 四〇七頁)といった書き出しで始まる。近い時期の『中央公論』を見てみると、谷崎の言う論説が、

東京朝日新聞記者、高山覚威による「新聞紙振仮名廢止論」(『中央公論』第三十三年三月号(大正七年三月一日、中央公論社))であると分かった。

「新聞紙振仮名廢止論」は、新聞で使われる漢字には「ルビを要求するのが自然である必然である」(『中央公論』第三十三年三月号五十五頁)といった主張を唱える「新聞紙振仮名支持者」に対して書かれた論説である。高山は、漢字が「無制限に種々雑多な多くの字数を有する」(五十八頁)ためにそういった主張が生まれるのだとし、新聞に振り仮名を付けないための施策として「漢字の数を少く」(五十九頁)し「六ヶしい文字を排斥して易しい文字に就く事」(五十九頁)を挙げている。漢字を減らして平易な文字のみを使用するというのは、まさしく「漢字削減論」に基づいた意見と言える。

これに対して谷崎は「梅雨の書齋から」の中で、「漢字の使用は制限すべきものではなくて整理すべきものである」(『全集(六)』四〇九頁)と主張する。誰にでも読める文章を目指し漢字を減らさんとする漢字削減論者たちに一石を投じるこの主張は、「漢字整理論」と言えよう。

こういった主張は、何も高山の論を受けて生じたものではない。先掲の「ノートブックから」でも「漢字と仮名の遣ひ方を規則的にし、簡単にし、明瞭にする研究の方が遙かに急務ではなからうか」(『全集(九)』三九一頁)と、漢字の使い方を整えることが「悲しむ可き現象」の解決法であると論じている。肝心の整える方法であるが、「ノートブックから」では「一定の漢字には必ず一定の発音のみを与」(三九二頁)えて「語原の意味が充分保たれて居るやう」(三九三頁)に使用すべきだと、また「梅雨の書齋から」では「漢字にはそれぞれ一定の訓や音があるのだから、それ以外の読ませ方はしないやうに」(『全集(六)』四〇七頁)し、「飽く迄も其の言葉の語源を尋ね」る必要があると(四〇九頁)、それぞれの随筆で同様の規則を紹介している。ここから、「魔術師」前後の谷崎が、漢字の使用に関して、一定の音訓を用い語源に基づいた使用をするといった考えを首尾一貫して持っていたことが分かる。さらに「梅雨の書齋から」では、これらの規則を守ることができさえすれば、「いかに豊富に使用したところで混乱を来たす恐れはない」(四〇九頁)と断言し、「国語を豊富にする」(四〇九頁)ための方法であると説いている。以上が谷崎の「漢字整理論」である。

(表1) 「魔術師」における外国語表記

【凡例】

- ・ 芦屋市谷崎潤一郎記念館所蔵「魔術師」原稿を底本とし、枚数および行数は同原稿に従う。
- ・ 場面1「公園に入るまで」は原稿1枚目第4行～23枚目第7行、場面2「公園の中」は同23枚目第8行～50枚目第1行、場面3「魔法の森」は同50枚目第2行～67枚目第1行、場面4「魔術の王国」は同67枚目第2行～108枚目第7をそれぞれ表す。
- ・ 漢字にカタカナでルビが振られている表記を「カナルビ表記」と呼ぶ。
- ・ 引用に際して、字体は通行のものに改めた。

場面	枚数	カタカナ	計	アルファベット	計	カナルビ	計
1	公園に入るまで	3		12	“venal nymph”	6	0
		6	アズニユウ				
		9	アムファイセアタ				
		10	スペイン フィルム		Hippodrome Fantouma Protea		
		11	ホオマア イリアツド ダンテ アメリカ ポオフィルム				
		12			“The Black Cat” “The Pitand the Pendulum”		
		20	アーク燈				
		21	ベンチ				
		22	ベンチ				
2	公園の中	24	イルミネエシヨン バルコニイ	15		2	0
		26	ヅボン ギオ●ンニ、セガンテイニ ※●は、「ワ」に濁点				
		30	フエアリー、ランド イルミネエシヨン グラント、サアカス チャリネ		Grand Circus		
		31	グラント、サアカス チャリネ				
		33			Doom's Day		
		35	サラセニツク ピサ				
		38	エメラルド アーチ				
		39	バンキ				

場面	枚数	カタカナ	計	アルファベット	計	カナルビ	計
3	魔法の森	51	8		2		0
		52					
		54					
		55					
		56		Silhouette			
		57					
		62		"The Kingdom of Magic"			
4	魔術の王国	68	17		0		9
		70					
		72		クアハン 頭帕			
		73		トローガ 袍衣 草鞋			
		74					
		75					
		78					
		83					
		84					
		104		クアワン 半羊神 半羊神			
		106		半羊神			
		107		クアワン 半羊神 半羊神 半羊神			

(表2)「魔術師」までの作品に用いられるカナルビ表記

【凡例】

- ・『谷崎潤一郎全集 全26巻』（中央公論新社）に小説として収録される計41作品に登場するカナルビ表記をすべて列挙する。
- ・引用はすべて上記の全集に拠り、字体は通行のものに改めた。
- ・地名、国名を表すものは太字ゴシック体で表記した。

発表年	作品名	カナルビ表記	計
明治43年	誕生		0
	象		0
	The Affair of two Watches		0
	刺青	エジプト 埃及	1
	麒麟		0
明治44年	信西		0
	彷徨		0
	颯風		0
	少年	スリッパ マッパ マントルビニス 床靴、燐寸、煖爐棚	3
	幫間		0
	秘密	トルコ コゾブ 土耳其、洋盆	2
明治45／大正元年	悪魔	ライヴアル 競争者	1
	あくび	スクールライフ、年級、逐ひ出し、幽鬱、年級、 ページ、ゴースト 頁、沃度、幽霊	8
	朱雀日記	ローマ 羅馬	1
	羹	プライド、サトウキビ、プライド、純潔、生命、天津風 誇、歩道、誇、純潔、生命、天津風	6
大正2年	続悪魔		0
	恐怖	シバ、シバ 布、喇叭	2
	少年の記憶		0
	恋を知る頃		0
	熱風に吹かれて		0
大正3年	捨てられる迄	オーブンカー、ヒナシ、フタナ、イリュージョン、フェイバリシタル、ヴァン 無蓋車、性、白金、幻覚、技巧的、処女、 詳細、幻覚、甘い、敵手、暴君的、 不祥 ※●は、「ワ」に濁点	12
	憎念		0
	春の海辺		0
	饑太郎	インフェルノ、ハラマニス、ゾルダトリエ、ムラサキ、スクリュー 地獄、天国、浄罪界、恍惚、衝立	5
	金色の死	ライン、カクテル、コロンビア、サント、マイグランド、メカニカル 線、効果、共存状態、才能、料理、美学、 精神的、実感的、盆地、外袍、草履、 廊下、白楊、小亭、浮彫、半羊神	16

発表年	作品名	カナルビ表記	計
大正4年	お艶殺し		0
	懺悔話	類系、挿話、詩的、停車場	4
	創造	象徴	1
	華魁		0
	法成寺物語		0
	おオと巳之介		0
	夢	幻影	1
独探	オーストリア、トルコ、キリスト、西伯利亚、ベルリン、 維納、亞細亞、倫敦、亞米利加、渡り鳥、 愛蘭自、布哇、青島、奧太利、維納	15	
大正5年	神童	キリスト 基督	1
	鬼の面	スペイン、停車場、停車場、停車場、停車場、 停車場、停車場、巴里、硝子、希臘、 埃及	10
	恐怖時代		0
	亡友		0
	美男	ベキン 北京	1
	病蓐の幻想		0
大正6年	人魚の嘆き	アラビヤ 亞拉比亞	1
	魔術師	ターバン、トーフ、サンダル、フアウン、フアウン、 頭帕、袍衣、草鞋、半羊神、半羊神、 半羊神、半羊神、半羊神、半羊神	9